

2月1日ゼミは開催します**『女王の国々と狗奴国 Version II』**

—2月1日ゼミ紹介文: 榎田鉄男会員記—

前回、2022年11月に『女王の国々と狗奴国について考える』と言うタイトルでゼミを行いました。今回のゼミはそれをバージョンアップしたものです。

邪馬台国を含む女王の国々と狗奴国は九州にあった。その主たる理由は九州の遺跡の方が近畿の遺跡より鉄や絹などの遺物が魏志倭人伝の記述により多くマッチングするからですが、加えて『水行10日陸行1月』と言う長い旅程が邪馬台国ではなく奈良の纏向に至る旅程と考え得るからです。

魏志倭人伝には邪馬台国は遠くにあったようには書かれていません。このことはこの長い旅程と矛盾します。この矛盾が生じた理由は梁書にある266年の晋への朝貢で台与と思われる女王の使者と男王の使者が共に謁見した際の中国側の誤解によって生じたと考えています。この男王が誰であったのかが注目されますが、彼は奈良の纏向に新しく誕生したヤマト王権の男王(自説では公孫恭)であり、その使者が『邪馬台国から陸行1月水行10日かかって来た』と述べたことを陳寿が魏志倭人伝の原書に挿入したと考えます。

前回、魏志倭人伝の信憑性を検証し、その信憑性は高いとした上でそこに書かれている倭王・卑弥呼とは、倭とは、女王国とは、邪馬台国とはなどを考察し、記載された30余りの国々が九州のどこにあったのか、そしてそれらはどのような国であったのかを見てきました。定説ではこれらの国々の中で対馬国は対馬島、一大国は壱岐島とし

ますが、これはほぼ魏志倭人伝の記述通りになります。

しかし末盧国を唐津、伊都国は糸島とすると里程や方向が記述と合いません。それぞれを博多、大宰府とすることで記述通りになります。そして邪馬台国を筑紫平野、投馬国は宮崎、名前だけが記載された21の国々は熊本北部、狗奴国は熊本南部でほぼ間違いないと考えています。

そのように設定した時、それぞれの国々はどのような役割を持ち、またどのような国々であったのか思い巡らしてみました。伊都国は場所も現在の大宰府であると同時に機能的にも後の大宰府政庁と同じく対外交渉の場であり倭の領主・公孫氏や魏の役人たちとの折衝の場でした。しかし後の大宰府政庁が持っていたこれらの機能に加えて3世紀の伊都国は場所的に考えて筑紫平野にあった邪馬台国を守る関所的機能も併せ持っていたと思われます。

現在、筑紫平野には吉野ヶ里遺跡を始めとする多くの弥生遺跡があります。そこから出土する多数の箱式石棺や銅剣、銅矛類はそこが王制の地であったことを示しています。一方で21国と推測される阿蘇を含む熊本県北部には王制を示すものは見られません。しかし、そこからは鉄器類が日用品のように住居跡から多数見つかります。鉄器類が一般化しており、そこが当時非常に発達した地域であったことが窺われます。

ここまでが卑弥呼を共立した女王の国々(倭国)であり、それは『朱丹を以て其の身体に塗ること中国の粉を用うるが如きなり』とあるように中国からの弥生渡来人の国と言えます。そのことは北部九州一帯が考古学的に弥生渡来人の多い地域であったことも一致します。

一方、狗奴国のことは魏志倭人伝では『男子は

大小と無く、皆黥面文身す』とあり、黥面文身とは入墨のことですが、縄文時代の土偶には入墨が見られます。また『今の倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え』ともありますが、京大名誉教授・片山一道氏は縄文人は海に潜るダイバーだったとしています。このようなことから狗奴国は縄文色の強い国と言うことになります。狗奴国に想定される熊本南部から多数出土する免田式土器には重弧文と言う文様があり、縄文土器の系譜を引き継いでいます。この地域では最近まで焼き畑農業が行われており縄文色の濃い土地でした。

ヤマト王権の礎を築いた公孫恭は狗奴国に金メッキを施した鍔金獣帯鏡を与え南から女王の国々を攻めるよう宮崎側から促しました。しかし、その企てはうまくはいかなかったようです。遺跡、遺物からは狗奴国のあった熊本の南半分と北側との攻防の跡を見出すことはできません。

熊本全体を見渡すとここは他の九州地域より150年以上遅れて前方後方墳が築かれています。それはこの地がヤマト王権の配下になるのが遅れたことを意味します。熊本の地を配下として抑えるために築かれたのが西都原を始めとする巨大古墳群と考えています。

また狗奴国と女王の国々の国境と推測される緑川近くには塚原古墳群と言う大規模な古墳群があります。ヤマト王権がこの地を治めるのに多大な工数を使ったことが分かります。熊本で最古の前方後円墳が銀象嵌を施した鉄剣で有名な江田船山古墳(5世紀末～6世紀初頭)であったのもこれで領けます。この鉄剣もヤマト王権が懐柔策の一環として授与したのではないのでしょうか。

白村江の敗北で大陸出自であることを隠すため、記紀では九州で最初に侵攻した宮崎をヤマト王権発祥の地とし、そこで最も秀麗な山・高千穂峯を天孫降臨の場所にしたのだと思います。

以上、魏志倭人伝にある国々がどのような国々であったのか、今回のゼミでは改めて思いを巡らしお話ししたいと思います。以上。

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。

3、会場には12時30分から入場できます。以上。

稲作農耕起源説の変遷

—磐城 妙三郎会員記—

1. 稲作農耕に関する総合的研究は農学者の安藤廣太郎と民俗学者の柳田國男による1952年に発足した「稲作史研究会」が最初とされる。稲の原産地と稲作の起源地および日本列島への伝播ルートの推定がその目的であった。戦後間もないことでもあり、戦前の研究資料や古文献などの文献史料によらざるを得なかったが、原産地をインド、インドシナ半島、中国広東地方に、稲作の起源地をインドおよび中国に、日本列島には野生稲が存在しないことから、中国江南地方(広西省)の稲作が日本列島へ伝播したと推定した。

2. アッサム・雲南稲作起源説

1960年代に農学者の渡部忠世は東南アジア・インド亜大陸を中心にフィールドサーヴェイを実施、稲粒の形状からラウンドタイプのジャポニカ、ラージタイプのジャパニカおよびスレンダータイプのインディカに分類、さらにモチ種、ウルチ種、陸稲、水稻などの各地における分布状況からジャポニカとジャパニカの起源地を雲南地域、インディカの起源地をアッサム地域と推定した。一方、1970年代には文化人類学者の佐々木高明と植物学者の中尾佐助らが「日本文化の要素が中国雲南省を中心とする東亜半月弧に集中する」として、西日本から台湾、華南、ブータン、ヒマラヤに広がる類似した文化地域を照葉樹林文化圏と名づけた。根菜類の水さらし利用、養蚕、焼畑農業、陸稲の栽培、モチ食、麴酒、納豆など発酵食品の利用、鵜飼、漆器製作、歌垣、お歯黒、入れ墨、家屋の構造、服飾などが照葉樹林文化圏の特徴とし、稲作文化や畑作文化などについて渡部忠世説を支持した。

3. 中国における稲作研究史 [長江文明の曙 梅原猛/巖文明他著 角川書店 2000年より]

中国新石器時代の考古学体系の創始者北京大学考古学教授巖文明(1932～2024)によると、「1950年代に長江中流域の湖北省京山県屈家嶺遺跡で稲作関連の出土物が発見され、BC3千年代前半に稲作農耕が存在したことが明らかになった。1970年代には長江下流域近くの浙江省余姚県に河姆渡遺跡が発見され稲作農耕の起源をBC5千年頃まで

遡らせることとなった。1980年代になると長江中流域の湖南省澧県に彭頭山遺跡が、湖北省京山県屈家嶺遺跡の最下層部の城背溪遺跡から稲作農耕の証拠が発見され、ともに河姆渡遺跡より千年から2千年以上も古くなることが判明した。また1990年代にはより古い段階の稲作農耕の痕跡が江西省万年県の仙人洞遺跡と吊桶環遺跡からイネ科植物の花粉やプラントオパールが、湖南省道県の玉蟾岩遺跡から稲粃が検出され、稲作農耕の起源が1万年以上前である可能性が推測されている。(稲粃は4粒で未だに年代測定は行われていない)水田遺構の最古の遺跡としてはBC5千年とされる長江下流の浙江省嘉興市の馬家浜遺跡の水田跡である。」

4. 日中合同長江文明学術調査 [大河文明の誕生 安田喜憲著 角川書店 2000年より]

河姆渡遺跡に興味をもった日本人環境考古学者の安田喜憲氏がいた。縄文早期から前期にかけての福井県鳥浜貝塚の発掘に関わっていた安田氏は文化大革命後の混乱期に日本人研究者として初めて1984年に河姆渡遺跡を訪問、1987年に「世界史のなかの縄文文化」を著した。この著書の評価して国際日本文化研究センター(日文研)に助教授として招聘したのが、初代センター長の梅原猛氏である。1993年に梅原氏は安田氏とともに河姆渡遺跡と良渚遺跡とを訪れ、7千5百年前の稲作遺跡や良渚遺跡出土の玉器を見ていたと感動し、日文研主催の長江流域の遺跡調査の決意を固めたとのことである。翌年、梅原氏は当時京セラ創業者の稲盛氏からの資金援助を取り付けると、安田氏には日中合同学術調査の計画策定を命じた。中国側との交渉は遅々として進まず、3年越しの交渉の末、1996年に日中合同学術調査が開始される運びとなった。その間、文部科学省および日本学術振興会が交付する科学研究費助成事業に応募し、1997年から5年間で4億5千万円の研究費の獲得に成功した。調査は日本側が主として環境考古学やハイテク考古学を担当し、中国側が主として考古学的発掘調査を担当することで決着した。最初の調査対象遺跡は四川省成都市から南西約20kmにある龍馬古城宝墩遺跡が中国側から指定された。BC2500年からBC1200年に営まれた四川盆地の新石器遺跡で北東約1100m、南西約600mの長方形で周囲に環濠、城壁に囲まれた城壁都市であることが判明し

た。この調査では稲作農耕の痕跡は見つかっていない。文科省の助成が始まる1997年には本格的な交渉が開始され、調査対象は長江中流域の湖南省澧県城頭山遺跡とその周辺平原として、調査期間は1998年から3年間とする中国国務院の許可がおりた。具体的な調査は前回同様に日本側が主として環境考古学・ハイテク考古学分野を担当し、中国側が考古発掘調査を担当することとなった。日本側の調査参加者は延べ70名以上に及ぶことになる。城頭山遺跡はBC7千年~BC2千5百年にわたり、彭頭山文化、城背溪文化、湯家崗文化、大溪文化、屈家嶺文化の文化層を含む中国最古の城壁都市として知られていた。ラジコンヘリによる低空測量の結果、直径360mの円形城壁都市であることが判明した。城壁はこれまでの中国側の調査によりBC4千年頃の築造とされていた。円形の城壁には東西南北に城門があり、城外の西側には環濠が残存している。中国側の新たな発掘調査の結果、東門近くの城内からBC4千年代の祭壇跡が発見された。祭壇と城壁の間には、小面積の水田跡も発見されており、城内の祭壇と水田はなんらかの稲作儀礼を行うものではないかと推定されている。安田氏によればこのような稲作儀礼が行われていたとすれば、このころには長江中流域では本格的な稲作農耕が行われており、稲作文明の黎明期と位置付けている。了

4月5日ゼミは7月ゼミに変更します

武蔵の古代史一小川 孝一郎会員は、講師の都合で、7月に変更になりました。

次回3月1日ゼミ・テーマ

5世紀から7世紀迄の朝鮮半島と倭国の交流

—永井 輝雄会員—

以上。

本号は3ページです。